



建築はこのくらいシンプルでいいんだと この別荘に来て学ばされました

——小堀哲夫さん

Profile 小堀哲夫
こぼりてつる1971年岐阜県生まれ。1997年法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程修了後、久米設計に入社。2008年小堀哲夫建築設計事務所設立。2020年法政大学教授、梅光学院大学客員教授。2017年日本建築学会賞、JIA日本建築大賞を受賞。

「建築はこのくらいシンプルでいいんだとこの別荘に来て学ばされました」
——小堀哲夫さん

「心の宿る場所」をつくることに専念したら、まるで最後のピースがはまるように長方形に十字の壁を配置した、極めてシンプルなプランができ上がりました。デザインしたといふより、彫刻家が石や木の中にある形を見いだすような、そんな感覚に似ているかもしませんね」
そして同じくルイス・カーンが残



「それは、人を生かし、人が内在する能力を最大限に引き出してくれる建築のこと。それは僕の究極の目標でもあります」と久明さん。
まさにこの別荘こそが「The Place of Availability」といえる。お父さまが回復したエビソードだけでない。小堀さんも「ここに来ると、思わず本音を話してしまう。建築がそうさせている」と言い、多くの友人たちもここで互いに心を通わせ、いつも以上に親密な時間を過ごして帰る。

シンプルな空間の中には多様な居場所が点在し、パーティの際はダイニングで食事を囲みながら、キッズ側に直子さんが座って、キッチ

ン、「部屋とは心の宿る場所である」(The Room is Place of Mind) (※注1)というルイス・カーンの部屋の概念を思い出し、何かを見せようという余計な自我から解放されたのだ。

「心の宿る場所」をつくることに専念したら、まるで最後のピースがはまるように長方形に十字の壁を配置した、極めてシンプルなプランができ上がりました。デザインしたといふより、彫刻家が石や木の中にある形を見いだすような、そんな感覚に似ているかもしませんね」
そして同じくルイス・カーンが残



時を経て愛され続ける別荘の魅力とは?

一緒に海外へ建築を見に行くほど、互いの設計思想に共感しているという矢板久明さん、直子さんと、同じく建築家の小堀哲夫さん。某日、夫妻に招かれて別荘への再訪を果たした小堀さんとともに、別荘における“The Place of Availability(恩恵の場所)”をテーマに語り合いました。

この別荘は自分にとつて体の延長のようなもの

久明さんがこの別荘を設計したのは36歳のとき。それまではオフィスビルやホテルなど大規模な建築が多く、住宅設計はこれが初めてだった。当時、設計をしながら久明さんは不思議な体験をしたと振り返る。

「ここに窓を開けよう」と考へると自分の頬に風が当たったような感覚がして「ここには朝日が入るな」と考へたら自分の体がぱっと温かくなる。この建物があるで自分の延長のように思えたのです」

その体感そのまま空間として立ち上がった「南軽井沢の家」。設計の楽しさを改めて実感し、久明さんにとつて転機となつたプロジェクトだつた。竣工から約20年の間は、夏季に1ヶ月半ほど両親を伴つて避暑に訪れ、次第にケアの比重が多くなると、軽井沢で過ごす時間も長くなり、ここから仕事に通うこともあつた。長期の入院で歩けなくなつたお父さまを連れてきたときのこと。3週間ほどここで過ごしたところ、歩けるようになり、主治医も驚いたといいう。「もともと軽井沢は、屋根のない病院」ともいわれる癒やしの地。景色を見ながら、一日の大陽の動きとともに規則正しい生活を送り、自然を受いたら父が歩けるように。この場所の力を実感しました」と直子さん。

北向きの家だからこそ、まぶしさを感じることなく、太陽に照らされた美しい景色を眺められる。朝はダインングの窓から朝日が入り、夕方は西側の窓から壁梁に木漏れ日によって陰影が描かれる。光は反射によつて柔らかな表情となり、光の移ろいは見ていて飽きることがない。

「後ろに山があり、前方は開放的ですが、盆地状になっている。これは用も変化し、ここ数年は友人を呼ぶ機会が増えた。友人の小堀さんはこれまで3回訪れ、家族を連れて泊まれたこともあつたそう。この別荘の魅力について、小堀さんはまず地形に着目する。

「後ろに山があり、前方は開放的ですが、盆地状になっている。これは用も変化し、ここ数年は友人を呼ぶ機会が増えた。友人の小堀さんはこれまで3回訪れ、家族を連れて泊まれたこともあつたそう。この別荘の魅力について、小堀さんはまず地形に着目する。

「後ろは壁で閉じられているけど、トップライトからの光によつて、後ろからそつとガウンを掛けられた感じです。後ろは壁で閉じられていて、後ろからそつとガウンを掛けられる」と久明さん。

実は設計途中、久明さんは階段の突き当たりの壁に窓を開け、景色を大胆に見せようと考えていた。しか



心が宿る場所をつくることに専念したらこの建物が生まれました

——矢板久明さん



建築とは人を生かすもの。 そんな建築の力に気づかされました

——矢板直子さん

Profile 矢板久明・直子

やいたひさあき／1982年東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。1982年谷口建築設計研究所に入社。1994年矢板久明建築設計研究所設立。やいたなおこ／1982年日本女子大学人文学部住居学科卒業。1982年アーキプレーン建築研究所に入社。2002年内田直子建築研究所設立。2005年より矢板建築設計研究所を夫妻で共同主宰。2014年JIA新人賞、2016年The Architecture Master Prize GOLD PRIZE(米国)を受賞。



1 南側外観は、壁が一枚立っているような佇まい。壁の開口は極力少なくし、あえて閉じた印象にしている。2 屋上テラスはすぐ横に一枚屋根が架かる。右手が玄関で、屋根の下に潜っていくような感覚。3 リビングとはまた違う眺めの屋上テラス。ゲストを迎える場であり、パーティの際はセカンドリビングとしても活躍。4 玄関扉を開けると、すぐ階段が出現。5 「ここで夕焼けを見ながら、ワインを片手にマイルス・デイヴィスの『Kind of Blue』を聴くのが至福のときですね」と直子さん。

*注1 出典／"The Room is a Place Mind"
*The Room, the Street, and Human Agreement, 1971 speech by Louis Kahn
*注2 出典／"Availabilities"
*Architecture, The John William Lawrence Memorial lectures 1972
*Lectures at Independence Hall 19 May 1971 by Louis Kahn